武蔵野日曜聖書講筵

真正の教会テサロニケ
――テサロニケ前書第１章――

１９９２年９月13日
小池辰雄

最初にできた模範的教会　パウロの最初の書簡　新宗教改革　静即動・動即静　十字架と聖霊がキリストの愛の極致　体感が一切　永遠的現在化　十字架という血の涙をもって贈られた聖霊　「主さま！」の沈黙の叫び　真正のエクレシア　召団讃歌Ａ57「火の民」

【テサロニケ前１】

1パウロ、シルワノ、テモテ、書を父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会に贈る。願くは恩恵と平安と汝らに在らんことを。
2われら祈のときに、汝らを憶えて、常に汝ら衆人のために神に感謝す。
3これ汝らが信仰のはたらき、愛の労苦、主イエス・キリストに対する望の忍耐を、我らの父なる神の前に絶えず念うに因りてなり。4神に愛せらるる兄弟よ、また汝らの選ばれたることを知るに因りてなり。5それ我らの福音の汝らに至りしは、言にのみ由らず、能力と聖霊と大いなる確信とに由れり。且われらが汝らの中にありて汝らの為に如何なる行為をなししかは、汝らの知る所なり。6斯て汝らは、大いなる患難のうちにも、聖霊による喜悦をもて御言をうけ、我ら及び主に倣う者となり、7而してマケドニヤ及びアカヤに在る凡ての信者の模範となれり。8それは主のことば汝等より出でて啻にマケドニヤ及びアカヤに響きしのみならず、神に対する汝らの信仰のことは諸方に弘まりたるなり。然れば之に就きては、何をも語るに及ばず。9人々、親しく我らが汝らの中に入りし状を告げ、また汝らが偶像を棄てて神に帰し、活ける真の神に事え、10神の死人の中より甦えらせ給いし御子、すなわち我らを来らんとする怒より救い出すイエスの、天より降りたもうを待ち望むことを告ぐればなり。

●最初にできた模範的教会

テサロニケ教会は、教会として最初にできたといってもいいような教会です。しかも、典型的な模範的な教会で、テサロニケ前後書をお読みになれば分かりますが、パウロは非常に誉めている。今日はそのテサロニケ前書の第1章です。テサロニケという所はもちろ

ん当時はローマの支配下にありましたから、ローマのマケドニア地方の首府になっていた。非常に大きな都市で、しかも東西の要衝にある商業都市でもあった。大部分の人はギリシア人です。しかし、またユダヤ人もいて、ユダヤ人はなかなか旧約のユダヤ教にこっていて、パウロの伝道に非常に妨げをするわけです。パウロに反対する。

ですから、テサロニケのギリシア人が即ち異邦人で、パウロが異邦伝道者と言われるのはそういうところからきている。ギリシア人が非常によくパウロを受けとる。そして、できた教会が実に模範的教会であるということです。使徒行伝第16、17章をごらんになると、

「テアテラの町の紫布の商人にして神を敬うルデヤと云う女ききき居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。」（使徒16・14）

ギリシアの最初の所ですね、そこで、ルデヤというのが心を開かれて最初にバプテスマを受けた。シラスというのはしょっちゅうパウロについて行ったお弟子さんですが、パウロとシラスはけしからんと言って、とっ捕まえて牢屋に入れたということが16章19節から書いてある。ところが、パウロとシラスはその牢屋の中で祈っていたら、

「25夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、26俄に大なる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。27獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』29獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』31二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』32斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。33この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、34かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。」（使徒16・25～34）

「われ救われん為に何をなすべきか」に対しては、

「キリストを受けとれ」

ということです。そういう事件が前にあった。「地震」といったって、これは霊震です。神さまがパウロの祈りに応えた。とにかく、パウロくらいの信交の次元に入ると、不思議なことがいくらでも起きる。

「40二人は獄を出でてルデヤの家に入り、兄弟たちに逢い、勧をなして出で往けり。」（使徒16・40）

「1斯てアムピポリス及びアポロニヤを経てテサロニケに到る。此処にユダヤ人の会堂ありたれば、2パウロは例のごとく彼らの中に入り、三つの安息日にわたり、聖書に基きて論じ、かつ解き明して、3キリストの必ず苦難をうけ、

死人の中より甦えるべきことを述べ『わが汝らに伝うる此のイエスはキリストなり』と証せり。4その中のある人々および敬虔なる数多のギリシヤ人、また多くの重立ちたる女も信じてパウロとシラスとに従えり。」（使徒17・1～4）

「敬虔なる数多のギリシヤ人」というのが、テサロニケの教会の主流になるわけです。そうすると、ユダヤ人が妬みを起こして、どうのこうのと。そして、ひっくり返そうとした。そこで、パウロは迫害されるので、馬鹿らしいから、ベレヤに行ってしまう。

「5ここにユダヤ人ら嫉を起こして市の無頼者をかたらい、群衆を集めて町を騒がし、又ふたりを集民の前に曳き出さんとしてヤソンの家を囲みしが、6見出さざれば、ヤソンと数人の兄弟とを町司たちの前に曳ききたり呼ばわりて言う『天下を顛覆したる彼の者ども此処にまで来れるを、7ヤソン迎え入れたり。この曹輩は皆カイザルの詔勅にそむき他にイエスと云う王ありと言う』8之をききて群衆と町司たちと心を騒がし、9保証を取りてヤソンと他の人々とを釈せり。

10兄弟たち直ちに夜の間にパウロとシラスとをベレヤに送りいだす。二人は彼処につきてユダヤ人の会堂にいたる。11此処の人々はテサロニケに居る人よりも善良にして心より御言をうけ、この事正しく然るか然らぬか日々聖書をしらぶ。12この故にその中より多くのもの信じたり、又ギリシヤの貴女、男子にして信じたる者も少からざりき。13然るにテサロニケのユダヤ人らパウロがベレヤにも神の言を伝うることを聞きたれば、此処にも来りて群衆を動かし、かつ騒がしたり。14ここに兄弟たち直ちにパウロを送り出して海辺に往かしめ、シラスとテモテとは尚ベレヤに留まれり。15パウロを導ける人々はアテネまで伴い往き、パウロよりシラスとテモテとに、疾く我に来れとの命を受けて立ち去れり。」（使徒17・5～15）

それからアテネ伝道に入っていく、ということが書いてあって、これが我々がこれから学ぶテサロニケの歴史的な事情であるわけです。

●パウロの最初の書簡

これはパウロが書いた最初の書簡です。大体四週間位ここで伝道したようだ。しかし、それでもって教会が確立したわけです。テサロニケ教会ですね。

【テサロニケ前1】

1パウロ、シルワノ、テモテ、書を父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会に贈る。願くは恩恵と平安と汝らに在らんことを。

「シラス」と「シルワノ」は同じ人。これはコリントから書いた手紙らしい。大体、紀元

50年前後です。「恩恵と平安」という言い方は、しょっちゅうパウロは手紙の最初にしている。「恩恵と平安」といったって、キリスト自身が恩恵の主体ですから、キリストという恩恵の主体を受けとれば、それは平安である。だから、別なことではない。恩恵即平安。二つの事柄ではない。「賜物」というと、恩恵から来る、派生するいろいろなものが賜物ですけれども。「恵み」「カリス」という言葉はキリスト自身。キリストの一切が恵みなんです。別な言葉でいえば、「救い」と言ったっていい。「救いと平安」と言ったっていい。

「救いの在るところに平安あり。恵みの在るところに平安あり」

と。山上の大告白の、

「恵福（さいわい）なるかな……」

という言葉がありますね。あの「さいわいなるかな」は「恵まれたるかな」ということですから。いわゆる「幸せ」なんていうものではない。この世の人達はよく「幸せ、幸せ」というけれども、「幸せ」なんてものはあてにならない。ところが、キリストの「さいわい」は、私は「恵福」と書く。

「恵まれたるかな」

という。「恵み」だけでもいい。

「恵みからくる平安が汝らに」

ということで何も二つのことではない。「恵みからくる平安が汝らにあらんことを」の「あらんことを」は日本語の訳で付け加えたので、ギリシア語では、「…汝らに」でおしまい。

●新宗教改革

2 **われら祈のときに、汝らを憶えて、常に汝ら衆人（もろもろ）のために神に感謝す。**
憂えてない。感謝している。
3 **これ汝らが信仰のはたらき、愛の労苦、主イエス・キリストに対する望（のぞみ）の忍耐を、我らの父なる神の前に絶えず念（おも）うに因りてなり。**

第3節は非常に力強い。「信仰」というものは動的なものである。『使徒らの昔を慕ひて』（1992年7月刊）という本に私は書いたでしょ。67頁の「23 新宗教改革（1.）」のところに、

「信仰自身が即ち内的行為なのである、
全存在を以て基督の中に己（おのれ）を投入するからだ。
信仰はみ霊の故里に入りゆくことだ、
祈りが原存在に帰入することである如く。」

だから、「信仰」の「仰」の字は信じ行く「信行」と書いた方がいい。全存在でキリストの中に信じ入る、「信入」することです。ただ心理的に信ずるなんていうことではない。

「我を信ぜよ」

とキリストが言った時の、この「信ぜよ」というのはただ心理的に、サイコロジカルに信

ずるとか信じないとか、そんなことではない。「信ぜよ」ということは、

「全部、投入せよ。全托せよ。そして一つになれ」

ということです。

「信仰と行為は本来一如である」

ということ。

私はこの本をドイツ大使館の文化部長であったフリーゼさんという方に贈った。そしたら葉書で、

「……この独和のテキストは私にとって非常に価値のあるものであります」

と、非常に喜んで言ってきました。非常に短い葉書ですけれども、大分感激したらしい。信仰は、もう「信仰と行為」という二段構えの考え方ではダメだ。だから私は、

「新宗教改革」

と言ったんです。

「信ずるは易しいけれども、行うは難しい」

なんて、そんなことではない。「信ずるは易く」ない。

「信ずるとは全存在を投入すること、信入すること。信じ入る。キリストの中に入ることが大事なんだ」

と。誰も「信入」なんていう言葉は使わないだろうな。入らなければダメなんです、外側では。キリストもしょっちゅう神さまの中に信入していた。

「我と父とは一つなり」

というのは、この「信入」の境地だ。

「私は何ものでもない。なぜ、私のことを善いというか」

と言って、自分をゼロにした。自分をゼロにして、キリストは神さまの中に入ってしまった。そしたら今度は、

「我を見し者は父を見しなり」

と。もう、寸分ズレのない現実なんですよ、キリストという霊止は。私たちはしょっちゅう、ズレているけれども。相対的現実はズレても、絶対の現実はズレていない。それを本当に受けとっているか。そしたら、力が来ますよ。私の力の秘訣はそこにあるんだから。

●静即動・動即静

こないだ柳田邦男君が、

「先生の若々しさというのは、精神の若々しさだ。年齢を超越したところの若々しさだ」

と書いた。その「精神の若々しさ」はどこから来ているかというと、聖霊から来ている。地上の年齢は問題ではない。それでなければ、やがて90歳にもなるような者が、

「これから十年かかって詩を書く」
なんて、そんなバカなことを言う者は他にいませんよ。上から力が来るから仕方がない。力んでいるのでも何でもない。
これが、本当の「信」の世界です。一般のキリスト教がもうすっかり観念化してしまっているからダメなんだ。何も「宗教」なんて言わなくたっていい。
全く日本人はおめでたくできているよ。本当の意味で宗教をもたないから、そういうことになる。あなた方は毅然（きぜん）としていてくださいよ。単なる道徳の世界ではない。本当の聖霊の世界というのは本当の力の世界ですから。
「福音は言葉にあらず、力なり」
とパウロが言ったのはそのことなんです。言葉自身がまた、力なんだ。言葉と行為と、これも分ける必要はない。だから、
「わが言は霊なり、生命なり」
とキリストが言ったのはそのことです。意味ではない。意味の世界ではない。だから3節の、
「汝らが信仰のはたらき」
とは本当なんです。ガラテヤ書でパウロが、
「信仰のみで、行為ではない」
と言った。ユダヤ人が一生懸命で外的に――またパウロ自身がそれをやっていた――外的な行為を問題にしていた。
「そんなことではなかった。信仰だけだ。キリストを受けとるだけだ」
と。そしたら、「受けとるだけだ」と言っている人が最も激しい行為をしている。だから、
「本当の信は即、行である」
ということ。パウロもルターもそのことを自分で証している。ルターも
「信仰のみ」
と言った。今度は、それもまた観念化してしまって、無教会では行為を問題にしないで、「信仰のみ、信仰のみ」と言って、いい加減になってしまった。
静即動なんです。動即静。とにかく、凡ての本当の真理は、両極をもちながらそれが一如になっている世界です。二分されている世界ではない。全部、一如の世界です。だから、ペテロは、
「我を見よ」
と言った。「我を見よ」とは、
「キリストと一如になっている私が見えないか。わがうちなるキリストが見えないか」
ということ。威張って言っているのでも何でもない。
「我にあるものを汝に与う。…立て！」

と言ったら、生まれつきの跛者（あしなえ）が立ってしまった。大変な世界です。

賀川先生が多くの人を助けた。本当に賀川さんという人はキリストの愛が溶け込んでいるひとです。

●十字架と聖霊がキリストの愛の極致

それで、本当の「信仰」は、信じ交わる世界（信交）、信じ行く世界（信行）は働かざるを得ない。ただ仰いでいたってダメなんだ、いつまでたっても。間違っているんだ、この信仰の仰の字は。本当はギリシア語でいうとこれは、

「まことととされる」

ということなんです。「信ずる」という字は「まことととする」という字ですから。ところが、こちらが「まことととされる」というのが信交の現実なんです。

「キリストで本ものにされる」

という事態が信交の現実なんです。

「本ものだぞ。私は本ものにされているんだぞ」

というのが、本当の信交告白なんです。

「自分の信仰はまだ薄いから」

なんてなことを言っているようなことではない。

「自分の信仰なんか棄ててしまえ、キリストの信が入ってくるぞ」

と。そういう乱暴なことは、普通の教会の牧師さんは言わないだろうね。

「よく祈って信仰を深くしなさい」

なんて、きっと言っているんだろう。私はちょとおかしいかい。おかしくはない、本ものなんだ。

「キリストを受けとったから、動かざるを得ない、働かざるを得ない」

ということです。

「愛の労苦」。相手がどうであろうと、本当にどん底から愛していく。「愛する」とは「助ける」ことですから。相手を助け救うことが「愛する」ということ。

キリストの十字架と聖霊がキリストの「愛」の極致だから。己を棄てて、私たちに聖霊を降だした。この十字架と聖霊が「恵み」の内容です。恵みの内容は十字架と聖霊です。

「信仰・愛・望み」

と、ちゃんと三つでているでしょ。パウロがコリント前書13章で、

「信仰と望みと愛は永遠に保つ、そのうち最大なるものは愛なり」

と言っている。あの句がちゃんとここに出ている。

「汝らの信仰のはたらき、愛の労苦、…望の忍耐」

とパウロらしい言葉だ。こういうのを読んで、ピーンとこなければダメです。本当の信仰

は働きます。本当の愛は労苦する。本当の望みは忍耐をもって待ち望んでいます。しかも、望みは現実なんです。既に望みを捕まえてしまっている。いつ成就するかは、神さまがなさるだけの話。願望でないこの望みは必ず成就する。それが本当の与えられたる望みです。全部与えられたるものです。信も愛も望も全部、天与のもの。こっちは受けとるばっかり。それを私は「体受」、身体で受けとるという。全存在で受けとることを体受という。

●体感が一切

ゲーテの言葉に、

「ゲフュール　イスト　アッレス」（体感が一切である）

という言葉がある。これがドイツの文学者たちはよく分かっていない。ゲーテであろうが何であろうが、第一流のものは聖書を本当に彼らはよく消化していますから。聖書を読まないで、文学だの哲学だのと言ったってダメなんだ。

これは宗教問答をしているところの有名な言葉です。これは

「感情はすべてである。情感はすべてである」

と、大体みなそういう訳し方をしている。「ゲフュール」は、普通は「感情」という言葉だが、けれども、ゲーテがあそこで使っている本当の気持は「感情」ではない。「ゲフューレン」の「ゲ」というのは総体的な意味です。全存在をもって感得することであって、およそ分かる世界ではない。身体で全存在で感じ得る世界がこの「ゲフュール」なんです。「感得」或は「体感」と訳す。

「体感が一切である」

と私ははっきりそう書く。ドイツの学者がいろいろ言っているのをただ総合したって、本当の注解にならない。彼等よりか我々の方が本当のゲーテが分かるんだ。

全存在で感じなければ、体感しなければ、身体で感じなければダメです。存在的な感ずることであって、分かることではない。聖書も感得しなければダメなんです。理解ではない。

「これはどういう意味だ」

と理解したってどうにもならない。感ずると、こっちが変わるんです。聖書というのは、これを読む人が、自分の存在が変わるような感じ方をしなければダメです。それが本当の感入で、単なる悟りでもない。

「悟り」というのは知的な世界です。禅宗がそうです。悟りの世界というのは知的なんです。中世の神秘家でいえば、エックハルトが悟りの世界。タウラーというのがかなり行動的な世界。ゾイゼというのが体感の世界です。知・行・感。三番目のゾイゼというのが、この「ゲフュール」の世界を知った神秘家です。一般的には

「エックハルト、エックハルト」

と言っているけれども、エックハルトは知的に優秀なひとです。けれども、本当の神秘の

世界の、福音的な世界は、感じ入らなければダメなんだ。そうすると、自分がひっくり返える、変わる。自分が変わるような感じ方ですよ。

「これを受けとったから、全存在がひっくり返ってしまった」

と。回帰する。めぐり帰する。ゲーテは、

「さすがは、東洋には本当に私を分かってくれる人があるな」

と言っているだろう。それはもう聖霊の光で見ればちゃんと見える。聖霊は凄いですから、その光、その智慧、その力、その内容は限りなきものを持っている。あなた方は、聖霊をそれだけの無限の内容として自覚していますか。聖霊なんていうと、聖き霊と書くから、

「私はまだ聖くないから……」

なんて。そんなことを言っているのではないんだ。みんな、言葉に躓く。仕方がない。

自分がキリストに無にされると、無者の力というのはもの凄い内容になってくる。普通はそうじゃない。一生懸命で熱っぽくやっているけれども、自分の側の熱っぽさではない。

「汝の熱心」

とイザヤが言っている汝の熱心が来る――私の熱心ではない――それが動かす。だから、もの凄いエネルギーがくる。自分の持ち前のエネルギーなんて、そんなものではない。私の言うことは極端かい？　何と思われてもいいよ。私は本当のことを言っているんだから。

●永遠的現在化

「信仰のはたらき、愛の労苦、望（のぞみ）の忍耐」

ということは、

「信仰は働かざるを得ざるもの、愛は労苦するもの、望みは忍耐をなすもの」

と。そういうことをパウロは、二次的にこういうような解説的な言い方をしているけれども、この内容はそれぞれ全く一つなんです。パウロという人は本当に真理の現実を捕まえている人だから、こういう表現が自然にでてくる。大変な人だよな、パウロというのは。パウロがなかったら、新約聖書はない。パウロは元々キリストに反対していたパリサイのチャンピョンだった。これを復活のキリストはひっくり返してしまった。そして、パウロはキリストには参った。復活のキリストにひっくり返されて、

「我が目より鱗（うろこ）の如きもの落ちたり」（使徒９・18）

「われキリストと共に十字架されたり。もはやわれ生くるに非ず。御霊のキリストがわが内にありて生き給うなり」（ガラテヤ２・20）

「聖霊をもたざる者はキリスト者に非ず」（ロマ８・９）

と、パウロははっきり言っている。偽（にせ）クリスチャンがたくさんいる。でもクリスチャンが、観念クリスチャンが。観念はまだいい方だ。偽（にせ）はいかん、偽せものは。私も長いこと観念だった。心では或る程度感じていた。全存在の感じの世界は聖霊が来てからだ。

「**信仰のはたらき、愛の労苦、望の忍耐**」は、この三つは切り離すことはできません。「信仰」の主体は、二千年前のキリストの十字架・復活だ。その過去の事実が現在化する。「愛」は、正に今、キリストの聖霊でもって愛されている。「望み」は、来たらんとする最後の新天新地。その新天新地も現在化する。

「信・愛・望」
はちょうど
「過去・現在・未来」
ということになっている。その過去も現在も未来も全部、愛のところで現在化する。現在化している愛というものは永遠的です。永遠とは質的に滅びないことを永遠という。時間的に永いことではない。質的に不滅なものを永遠という。

4 **神に愛せらるる兄弟よ、**
「キリストに愛せられる兄弟よ」と同じこと。
また汝らの選ばれたることを知るに因りてなり。
これは、
「あなた方は本当に選びの器だ。私の福音の告白をよく受けとりましたね」
ということ。

5 **それ我らの福音の汝らに至りしは、言にのみ由らず、能力（ちから）と聖霊と大いなる確信とに由れり。且われらが汝らの中にありて汝らの為に如何なる行為をなししかは、汝らの知る所なり。**
「言葉ばかりではない。能力と聖霊と大いなる確信である」と。いろんな御霊の力が働いたからね。「言葉」といったって、もちろんこれは力ある言葉ですけれども。考えられた言葉ではない、啓示の言葉です。
「汝らの知る」というのは、頭で知るのではない。本当に受けとったことを、「愛をもって受けとる」ことを「知る」という。旧約聖書の「知る」というのはそういうところから来ている。その知るを一番良く表しているのは、ホセア書、エレミヤ記です。

●十字架という血の涙をもって贈られた聖霊

6 **斯て汝らは、大いなる患難のうちにも、聖霊による喜悦（よろこび）をもて御言をうけ、我ら及び主に倣（なら）う者となり、**
いろいろな「患難」というのは、ユダヤ人の迫害だよ。相変わらずユダヤ人は旧約にこだわっているから。今のユダヤ人だってそうだ。
あなた方一人ひとりが本当にパウロになってくださいよ、ヨハネでもいいよ。とにかく、使徒らに。
「使徒らを慕いて」

というのはそのことなんだ。使徒らの現実に我々一人ひとりがならなければ。ペテロだっていいよ。私はペテロにも、パウロにも、ヨハネにもなれる。彼らを読めば、ちゃんと彼らのその心境の中に、その現実の中に入れる。使徒行伝のペテロなんか凄いから。

藤井先生は、

「使徒行伝なんか、あんな行為の世界はあまり興味がない」

なんて言って、ほとんどやらなかったね。やっぱり、藤井先生も本当に聖霊の世界を知らないから。使徒行伝は凄い聖霊の世界だ。プラトンは、

「真理はソクラテス以上だ」

と言った。本当の真理の世界は上からくる。

6 **斯て汝らは、大いなる患難のうちにも、聖霊による喜悦（よろこび）をもて御言をうけ、我ら及び主に倣（なら）う者となり、**

「聖霊による喜悦」、御霊の喜び。いつも笑って喜んでばかりいる。それは聖霊の喜びともいえましょう。けれども、信仰の本当の現実は、喜びの奥には涙がなければダメなんです。本当の涙をもたない喜びなんてものはうわっついてしまう。キリストの聖霊は、十字架という血の涙をもって贈られたものだ。キリストの血の涙なんだ。

私の詩は凄いからね、まぁ、あと十年待っていてください。本当に高いものは、本当の深さをもっている。高いばっかりで浮いてしまったらダメだよ、深みをもたなかったら。

「今の世界は深みのない世界だ」

と、ティリッヒという神学者は言った。そのとおり。深処（ふかみ）のない信仰なんてのは、うわっつらのものはダメなんだ。福音書のキリストを瞑想してください。もの凄いから。これはもう何といったって、福音書のキリストは全聖書の中心ですから。そういうつもりで福音書を読んでいますか。いろんな意味で、キリストに圧倒されながら、キリストと一つにされながら、読んでいくわけだ。もうそれが本当の祈りの境地なんです。

私は今度の「エン・クリスト」52号（１９９２年10月秋季号）に「火の民」という讃美歌（召団讃歌A57、１９９２年８月23日作）を書いた。

「我は火を投ぜんために来たれり」

という、この火です。日本は火山国です。火山国の民が大自然の火にまさるところの聖霊の火の――我々は火の民である――その火の証をしろ、と。キリストが

「火を投ぜんために来た」

というのはそのことだ。「往こうか戻ろうか、オーロラの下で」という、あの譜で歌うようになっている。

●「主さま！」の沈黙の叫び

7 **而してマケドニヤ及びアカヤに在る凡ての信者の模範となれり。**

と、パウロが誉めている。「あなた方はすごいぞ、テサロニケ教会は模範だぞ」と。

8それは主のことば汝等より出でて啻にマケドニヤ及びアカヤに響きしのみならず、神に対する汝らの信仰のことは諸方に弘まりたるなり。然れば之に就きては、何をも語るに及ばず。

「神に対する汝らの信仰は」とは、「汝らの信仰告白は」ということです。

9人々、親しく我らが汝らの中に入りし状を告げ、また汝らが偶像を棄てて神に帰し、活ける真の神に事え、10神の死人の中より甦えらせ給いし御子、すなわち我らを来らんとする怒より救い出すイエスの、天より降りたもうを待ち望むことを告ぐればなり。

「来らんとする怒」とは最後の審判です。再臨のキリストを待っている。

「信仰と愛と望みが一つになっているね」

ということです。キリストの再臨はいつ来るか分からない。けれども、我々の中に常に再臨していらっしゃる。活けるキリストが臨んでいるから、これは再臨だものな。

「一日は千年の如く、千年は一日の如し」

というのは、そのことです。「一日は千年の如く」というのは――千年でも万年でもいい――とにかく、

「一日は永遠だ。永遠的な一日を毎日おくっていなさい。いつ仆れても、アーメン　ハレルヤだ」

というわけです。

「八方破れでいけ、人間的な整いは要らんぞ」

ということだ。八方破れだと、キリストはどこからでも入ってくる。一方だと、一方破れだとダメなんだ、八方破れでなければ。そうすると、キリストはどこからでも入って来る。そういうような、私の気合が分かるですか、皆さん。整っていたってダメだよ。私は人間的な整いなんて、そんなのは相手にしない。

「あの人は立派だ」

なんて、人間的な立派さが何だというんだ。

「しかし、八方破れのこの中には、何ものも破ることができないものが入っているんだぞ」

と。キリストをそれだけ本当に受けとっていますか。パウロはここで「神、神」といっているけれども、本当は「キリスト」なんだ。「神」ではダメだ。我々を贖い救ったのはイエス・キリストです。だから、私は「主さま」という。誰かが、

「『南無阿弥陀仏』や『南無妙法蓮華経』よりか、もっと簡単な表現はないでしょうか？」

と訊くから、

「ただ一言、『主さま』でいいんだ。私は、『主さま！』と全存在で、沈黙で叫べば、キリストは直ちに来たもうし、私は直ちにキリストの中に入る。それが本当の祈りの究極の現実だ」

と答えてやった。説明なんか要らん。絶言の世界だ。言葉の説明なんかできる世界ではない。絶言絶慮とはそのことです。

●真正のエクレシア

パウロは頭もいいから、いろんな七面倒臭いことを言うよ。ヨハネの方はそんな七面倒臭く言わない。とにかく、パウロというのはギリシア文化とヘブライ文化の両方ともそなえたようなやつだからね。キリストさまだけは、私は「奴（やつ）」とは言いません、

「キリストさま」

です。パウロであろうと、ペテロであろうと、みな奴なんです。

「我は罪びとの首（かしら）なり」

とパウロは言ったではないですか。内村鑑三が自分を「罪びとの首」と言った。私は第三番目の「罪びとの首」だ。

どん底に自分を置いてごらんなさい。これは最高の世界に入っていくから。

「まだ私はこれだけの…」

なんて、自分を「サムシング」（何ものか）だと思っていたらダメなんだ。イエス・キリスト自身がサムシングと思わなかったではないですか。

「恵福（さいわい）なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

というのはそのことです。

「神さまはお前を支配する。私がお前を支配するぞ」

と。もう平伏（ひれふ）して、

「ありがとうございます」

の他にない。祈りの本当の態勢は「平伏し」ですから。平伏しという言葉はいわゆる謙遜なんていう言葉では表せません。本当のぶっつぶれの人が本当の権威をいただくんです。

10節は素晴らしい言葉だね。そして、

10 神の死人の中より甦えらせ給いし御子（みこ）、すなわち我らを来らんとする怒より救い出すイエスの、天より降りたもうを待ち望むことを告ぐればなり。

「毎日、きてください」

と。キリストは前を歩き、後ろから押し出し、横で手をつなぎ、中に入り、自由自在だ、八方破れだと。

聖書は宗教道徳を教えているのではない。本当の光の世界、本当の生命の世界、本当の活きた真理の世界、私たちを活かさずんば止まざるところの世界です。パウロの書簡を読

んでいると、私は解説なんかしたくない。一緒になって叫びたくなる。それだけパウロは本当にキリストに占領された男だ。

だから、凄い伝道をした。私はまだ十年若ければ、伝道しますよ。もう私は最後の仕事にかかったから、伝道には出掛けて行かないけれども。私が叫んでいることに対して応答しないようなご連中だったら、私はもう叫ぶのは止めるよ。

このテサロニケ前書の第1章で、パウロさんと一緒にいろいろ叫びましたが、この第1章だけを読んでも、いかにテサロニケの教会員が本当のエクレシアであるかということが分かる。だから、私は「真正のエクレシア」と書いた。

この武蔵野召団が真正（まこと）のエクレシアでなければダメなんだ。本ものであること。本もののエクレシア。「ここは本ものだぞ」と。皆さん、生き生きとして、新しい人にそういう気持で迎えなさいよ。黙っていたらダメだよ。喜びと生命をもってね。

「あの教会に行ったけれども、なんか冷たくて、私はもう行く気がしなくなった」なんて、ダメだよ、冷たい感じを起こさせたら。武蔵野の方は少しおとなしすぎるんだな。私ばっかりがおとなしくないけれども。にぎやかに迎えてあげなさいよ。

それでは、今日は、そこでおしまい。

●召団讃歌A57「火の民」

（1992年8月23日作　中山晋平作曲「さすらいの歌」の曲で）

1
大和島根は　大海原を
望む島国　火の山国（やまくに）
到るところ　温泉（いでゆ）が湧くよ

2
大和民族　火の民よ
国旗は日の丸　選びの民よ
されば光の　無比の旗
神の光を　国民（くにたみ）なるぞ

3
されど神なき　身証すべし
自由に責任（せめ）なく　民主主義は
愛なき教育　秩序なし
かくていづこへ　義なき政治

4
今や世紀の　落ちゆくや
世界平和は　終末（おわり）は近し
十字架の愛　空望（からのぞみ）
愛とこの火を　聖霊の火よ
証しせん